

2024年9月1日（聖霊降臨後第15主日、特定17、B年）

牧師メッセージ

「愛されている」

（マルコによる福音書7:1-8, 14-15, 21-23）

司祭ヨセフ太田信三

ファリサイ派の人々をはじめユダヤ人は皆、昔の人の言い伝えを守って、念入りに洗ってからでないと食事をしませんでした。彼らは、かつてイスラエルの民に神が与えた律法を現実の状況に落とし込み、細かいルールを沢山作りました。それらは、昔の人の言い伝えとして重視され、人々も厳格に守ることが求められました。そんな彼らの前で、イエスの弟子たちは手を洗わずに食事をしたのですから、これは今で言う「炎上」です。確かに、衛生的に考えて食前には手を洗ったほうが良いと思うのですが、それを指摘したファリサイ派の人々の言葉には、相手を思いやる心はありませんでした。

ファリサイ派の人々を中心としたユダヤ人たちは、聖と俗を分離し、俗からなるべく遠ざかることで、清さを保とうとしました。「洗う」という彼らの行為にはその姿勢が表されています。しかし、彼らのことをイエスは「偽善者」と呼びました。彼らは「昔の人々の言い伝え」に拘りましたが、それはあくまで人間の教えであり、律法に込められた神の思いから離れていました。彼らは繰り返し「洗う」ことで、自らを正しく、清い者だとしました。そして、ルールを守らない人は汚れている、神に愛されることはない、と裁きました。さて、これが本当に律法を与えた神様のみ心だったのかというと、そんなはずはありません。

神は、人が神から離れず、互いに愛し合いながら生きられるように律法を与えました。けれども、人々はその律法により互いを裁き合い、愛から離れてしまっていたのです。細かいルールやマニュアルによって人は安心します。けれども、ルールを守ることにばかり心を注ぐと、そのもとにあった大切なことを忘れてしまうものです。わたしたち自身にも、ルールに当てはまらない人を白眼視するなんて言うことがやはりあるのではないのでしょうか。残念ながら、それが人間のリアルな有り様です。イエスはそういうわたしたち人間のところに来てくださり、聖と俗の壁をこわして、互いを裁きあうのではなく、互いに愛し合う交わりへ、つまり律法を与えた神のみ心へと人々を再び導こうとされているのです。

わたしたちのお手本はいつだってイエスです。イエスの交わりは、「あなたは汚れている」ということから始めるのではなく、「あなたは神に愛されている」というところから始まるものです。この世は往々にして減点方式ですから、あれが駄目、これが駄目と言ってきます。けれども、「あなたは愛されている」から始まるのがわたしたちクリスチャンの交わりです。互いを軽んずることなく、どのような身分であろうと、互いを神に愛された存在として交わり、それが教会共同体です。この世において、わたしたちの有り様がそのような交わりを示し続けられるものでありますように。